

平成19年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ヒラメ

学名 *Paralichthys olivaceus*

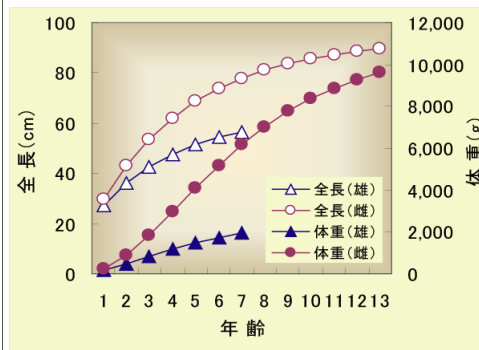
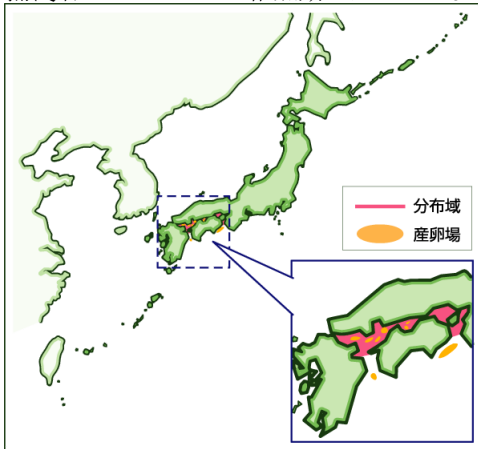
系群名 瀬戸内海系群

担当水研 瀬戸内海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 15歳程度
成熟開始年齢: 2歳(雄50%、雌80%)、3歳以上(100%)
産卵期・産卵場: 東部海域は2～5月、中西部海域は3～6月
索餌期・索餌場: ほぼ周年、瀬戸内海全域、紀伊水道、豊後水道及び四国の太平洋沿岸域
食性: 着底後の稚魚は主にアミ類、仔魚等、成長に伴い魚食性に移行
捕食者: 稚魚期にはマゴチなどの大型魚

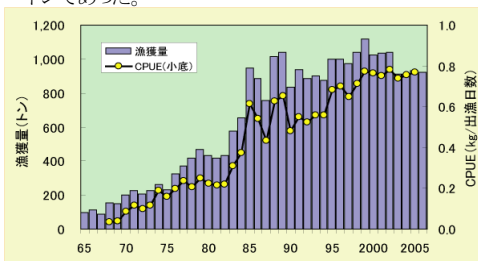


漁業の特徴

主に小型底びき網、刺し網、定置網によって、秋季に未成魚、冬～春季に成魚を主に漁獲している。漁法別の漁獲割合は経年的に小型底びき網が6割、刺し網が2割、定置網が1割程度である。小型底びき網や刺し網では小型魚も多く漁獲されている。

漁獲の動向

漁獲量は1970年代前半までは200トン前後であったが、1970年代後半～1980年代に増加し、1988年には1,000トンを超えた。その後漁獲量は横ばいで、800～1,000トン台を推移している。2005年は934トン、2006年は概数値で923トンであった。

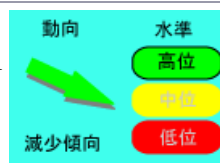


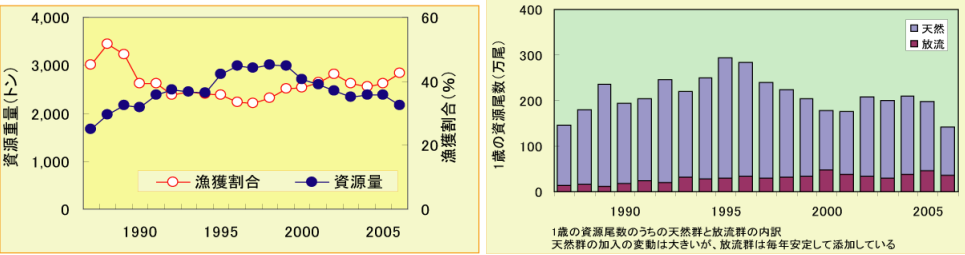
資源評価法

1987～2006年の年別年齢別漁獲尾数データを使用し、コホート解析を行った。解析では、6歳以上をプラスグループとし、5歳と6+歳の漁獲係数が等しく、2006年の1～5歳の漁獲係数は過去5年間の平均に等しいと仮定した。コホート解析結果の年別年齢別資源尾数に加え、漁獲量とCPUEの推移、燧灘におけるソリネットによる稚魚着底量調査結果を使用し2008年のABCを算定した。

資源状態

漁獲量とCPUEの推移から資源水準は高位と判断した。コホート解析の結果、資源量は1987年以降2,000～3,000トンの間を推移しており、2006年は2,170トンだった。1999年以降資源量に減少傾向が見られることから、動向は減少と判断した。現在の漁獲係数がF0.1やF30%を大きく上回っていることや、漁獲割合に増加傾向が見られることから、資源水準を維持するためには漁獲圧を減少させる必要がある。また、燧灘における2007年6月のピーク時の稚魚着底量は低調で、2008年の1歳の天然資源量は低水準と予想される。放流魚の添加効率は0.07～0.11で、毎年1歳の天然群に約35万尾が添加される。





管理方策

資源が高水準であるため、現在の資源水準維持を管理目標とした。ABC算定のための基本規則1－3)－(2)に基づきABCを算定した。資源管理基準は、2007～2012年の資源水準を維持するF (Fsim)とし、Flimit = Fsimの時の漁獲量をABClimitとした。ABCtargetの算出にあたり、RPSが低位で継続した場合を想定した状況での資源水準を維持するFを推定した。このときのFがFsimの約0.9倍であったことから、Ftarget = 0.9Fsimとした。

	2008年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	875	Fsim	0.87	40%
ABCtarget	812トﾝ	0.9Fsim	0.78	37%

- 漁獲割合はABC／資源量
- F値は選択率が1.0となる年齢の漁獲係数

資源評価のまとめ

- 資源水準は高位で推移している
- 1999年以降、資源量は減少傾向で推移している
- 稚魚着底量調査結果より、2008年の1歳の天然資源量は低水準と予想される
- 種苗放流魚の添加効率は0.07～0.11で、毎年1歳の天然群に約35万尾が添加されている

管理方策のまとめ

- 現在の資源水準を維持することが管理目標
- 小型魚の漁獲圧が高いため、再放流や禁漁区の設定など引き続き小型魚保護の方策の実施、検討が必要
- 漁獲圧と種苗放流数の両方を考慮した管理方策の検討が必要

資源評価は毎年更新されます。